

主 論 文 要 旨

論文題名

ダンスの身体表現における感情認知とインタラクションに関する研究

ふりがな しかない なお
氏名 鹿内 菜穂

主論文要旨

本研究では、ダンスにおける表現者（ダンサー）と鑑賞者の間の相互作用、および、複数の表現者間の相互作用について、心理指標を用いた定性的な分析とモーショキャプチャ技術を用いた定量的な分析を行った。

まず、表現者と鑑賞者の相互作用については、鑑賞者がダンスを観察する時、どのような印象や動作特性を手がかりにし、表現者の感情を識別しているかを分析した。その結果、鑑賞者は、3つの印象因子と4つの動作因子を手がかりにして、ダンサーの感情を識別していることが分かり、このことに基づいて、感情と印象と動作の間のモデルを構築することができた。さらに、人間の身体の構造を捨象して、主要関節のみを点で表現した動画映像だけで、鑑賞者が表現者の感情を読み取れるかどうかについても実験した。この結果、点だけの表現でも鑑賞者は感情を正しく認識し、各感情特有の印象が伝わることが分かった。さらに、一般に識別するのが難しいとされるポジティブな感情を表す動作間の比較も行った。「嬉しい」感情表現と「楽しい」感情表現を示す身体動作を調べた結果、体幹の動作の加速度が、このような違いの曖昧な2つのポジティブ感情の差を表すのに有効であることが分かった。

次に、表現者と鑑賞者の間の相互作用において、鑑賞者の存在の有無で表現者の心理状態と動作に変化が現れるのかを調べた。その結果、鑑賞者がいる時の方が表現者のポジティブな感情もネガティブな感情も高まることが分かった。さらに、鑑賞者がいる時の方が、速度、加速度、身体の開きの値が大きくなる傾向にあり、また、複雑なリズムで身体全体を動かしていることが分かった。

最後に、表現者間の相互作用について、対面と非対面における動作のタイミングの違いを分析した結果、対面の方が動作の一致度が大きかった。また、複雑なダンス動作では、四肢と体幹を動かして表現者が踊りあっていること、それぞれの腰と膝が活発に動いていることが分かった。

本研究で得られた結果は、舞踊の分野ではある程度経験的に知られていたことであるが、モーショキャプチャ技術を利用することにより、これらが、はじめて、定量的・客観的に明らかにされたことに意義がある。本研究で得られた知見は、今後の、ダンス教育のための学習・支援システム開発などへ寄与し得るとともに、身体動作に基づく、将来の高度なヒューマン・マシンインタラクション技術開発への基礎的知見を与えるものであると考える。